

## 第二章 フェとアンナンにおける3月9日の状況

### 第1節 フェへの到着とアライ大尉との会談

3月8日の14時頃に、私は小長谷総領事 [le Consul Général Konagaya] と渡邊領事 [le Consul Watanabe] とともにサイゴンを出発した。私たち3人は17時30分にトゥーラン [Tourane]<sup>1</sup> に到着し、アンナンの日本軍司令官・永野将軍 [le Général Nagano, Commandant en chef de l'Armée Japonaise en Annam]<sup>2</sup> と参謀長・稲井大佐 [le Colonel Inai, chef de son Etat-Major] に初めて対面した。彼らは皆、サイゴンの司令部から受け取った命令を実行することに大変忙しいと私には思われた。作戦範囲の広大な規模に比して、彼らの兵員は限られていた。彼らは私たちに、情報の伝達と連絡を担当するフェの分遣隊長と常に接触を保つようにと要請するのみであった。夜遅くに、私たちはフェの領事官邸に到着した。3月9日の朝10時に、私はフェの小さな分遣隊の指揮官であるアライ大尉 [le capitaine Arai] の訪問を受けた。彼は私に以下のように説明した。

「もしも日本の提案を受け入れることをドクー提督が拒否した場合（期限は今晚10時と定められている）、無線電信の合図によって、フォン河 [le fleuve des parfums]<sup>3</sup> の南東に駐留する B.A.L.<sup>4</sup> の歩兵や原住民衛兵隊の保安隊員 [les bao-ans de la Garde Indigène] をも含めたフェの全仏印兵力を、実力によって武装解除しなくてはならない。フォン河の対岸については、クアンチ [Quangtri] から到着するカワイ大佐 [le Colonel Kawai] の部隊が担当する。[ただし] 彼の部隊の人数は非常に少ないので、奇襲攻撃によってしか作戦の成功はありえない。彼は私に、慎重を期すため、日中は誰にも姿を見せないように求めた。【p. 34】

作戦が完了したら、彼が迎えに来て、私を王宮まで護送し、[バオ・ダイ] 皇帝陛下との最初の会談に臨むこととなる」。

（領事官邸で待機するようにと、彼が私に丁重に通告しているのだと、私は理解した）。

### 第2節 フェでの奇襲の準備

アライ大尉とのこの会談では、夜に行われるはずの作戦に関する日本軍の戦略的準備について、私は何も知ることができなかった。私の認識では、我が領事館の誰も、それについては知らされていなかった。私たちは日本軍の兵士の数が非常に少ないことを知っていたので、この作戦の結末についてかなり懸念していた。

---

<sup>1</sup> Tourane はダナン (Đà Nẵng) の仏領時代の名称。

<sup>2</sup> 当時アンナンに駐屯していたのは独立混成第34旅団であった (フェに旅団司令部)。

<sup>3</sup> フオン (香) 河 (Hương Giang) はフェ市の中央を流れる河川。le fleuve des parfums (香水の川) は、それをフランス語に訳した呼称。

<sup>4</sup> Brigade d'Annam-Laos (アンナン・ラオス旅団) の略称。

#### (A) (B) 歩兵と原住民衛兵隊に対する戦闘行為

日本軍が、たとえば民族主義者など、ある程度の数の現地住民の協力を得ているのであろうと、私たちは考えていた。ただし、私たち文民官吏の誰も、軍が実際にそうしようと努めていたのかどうかを知ることはできなかった。[ただし] そうありそうには、あまりみえなかった。というのも、日本軍は常に現地住民の誠実さに関して懐疑的な態度を示していたからである。[しかし] 後になって私たちは、次のように理解、というよりは推察した。軍事作戦が始まった後、日本軍は自らの行動を説明するアピールを行うことによって、強い側の陣営につこうとする、もしくは愛国的感情に目覚めた一部の現地住民のサボタージュ活動、脱走、裏切りなどの行動 [が生じること] を期待していたと。この目的のために、日本軍は現地語のアピールを準備して、住民の間に印刷物を配布したり、口頭で流したりする手筈にしていた。 [p. 35]

同様に、フランス軍人に向けたアピール文を別途印刷していた。

#### (C) (D) シタデル（城塞）内および王宮に対する行動

シタデル [la citadelle] 内での、そして皇帝陛下に対する準備について、日本軍は事前にも何も決めていなかったと思われる。日本軍のこうした受身の態度を方向づけたのは、いつも の用心深さからであったと想像する。

特筆すべきことは、3月9日朝に、アライ大尉がフエ近郊に狩に出かけていたバオ・ダイ皇帝陛下と皇后陛下の所在を把握できず、やきもきしていたことである。

浦部領事は日本軍当局から、王宮やマンダリン当局に対してなんらかの行動を起こすための打診を一度も受けていなかった。

#### (E) 地方省における加担 [Complicités]

地方の諸省 [les provinces] においては、日本軍が事前にマンダリン官吏に対して接近を試みることは物理的に不可能であり、またデリケートかつ膨大な役割に対応できる協力者も、このような任務を行うことのできる十分な通訳もいなかった。

結論として、3月9日の仏印処理のための準備は、厳密に軍事戦略に必要な範囲内においてなされ—私はその詳細を最後まで知ることができなかったのだが—、政治分野においてはほとんど何もなかったと断言しても、大きな間違いはないであろう。

#### (F) 兵士に与えられた指令

フエでの軍事作戦の準備については、 [p. 36]  
何人かの士官と後に交わした個人的な会話の中で、以下のことが明らかとなった。大隊長たち [les chefs de bataillons] と数人の士官のみが、3月9日の少し前になってようやく、サイゴンの総司令部 [l'Etat-Major Général de Saigon] が立てた計画について知らされた。しか

し、[一般の] 兵士たちは、計画について直前まで全く知らされていなかった。兵士たちは完全装備で出発した時、通常の夜間訓練のためだと思っていた。戦闘位置につく前に、詳細な指示と作戦の基本目的についての簡潔な説明がなされた時になって、彼らはようやく事態を理解した。その目的とは、翌日の朝に発表され、至る所に張り出され配布されることとなる総司令官布告第1号 [la proclamation N° 1 du Général Commandant en chef] に書かれているもの、すなわち「仏印軍の無力化」[“la neutralisation de l’Armée Franco-Indochinoise”] である。「作戦は不意を衝いて行わなければならない、最小限の被害にとどめるように遂行されねばならない。緊急の指示を受けた場合にしか武器を使用してはならず、とりわけ無意味な殺害をしてはならない」と兵士たちに明示された。戦闘が長引きそうにみえたとき、兵士たちは、なぜもっと集中的に攻撃しないのか、そうすれば任務の終結を早めることになるのにと自問した。彼らの上官たちは、無駄な被害を避けるべしとする上述の指令を忠実に守ったのである。士官たちがこの作戦の目的と方法をより詳細に兵士たちに説明することができたのは、戦闘が終結した後になってからであった。

以上のことから、次のことが言えるであろう。第1に、参謀部は、無駄な物的被害を引き起こすことなく、また何よりも、敵側における一徹密に言えば敵とはみなしていなかったわけだが一人的損失を最小限にとどめる形で、仏印軍の武装解除を巧みに実施することを望んでいた。

【p. 36bis】

第2に、参謀部はまさにそのために、最終段階まで日本兵に対してさえ作戦を徹底的に秘密にしようとしており、ましてや、この作戦に備えて事前にアンナン人の協力を得ることは不可能であった。

【p. 36ter】